中央大学法科大学院
平成21年新司法試験合格者祝賀会開く
162人の門出に祝意の輪広がる

中央大学法科大学院の平成21年「新司法試験合格者祝賀会」が10月5日、ホテル・グランドヒル市ヶ谷で盛大に開かれた。合格者162人のうち、この日は144人が出席し、前途洋々たる門出に祝意の輪が広がった。

◆「今の気持ちを忘れずに」永井総長・学長◆

午後6時、開会。盛大な拍手に迎えられて、144人の合格者が晴れやかな表情で入場した。

はじめに永井和之総長・学長が挨拶に立ち、「みなさん、おめでとうございます。私のときは、合格発表を見て一番に親に報告しました。今でも忘れられない一日です。みなさんも、合格発表のときの気持ち、今の気持ちを忘れずにいてください」と合格者にエールを送った。

お祝いの挨拶をする永井総長・学長

続いて久野修慈理事長が、「おめでとうございます。これから社会のあらゆる面で活躍して、正しい法律の道を歩んで中央大学の名を高めていただきたい」と挨拶。「これからの法律家に求められるものは国際性です。グローバリゼーションのなかで、全ての人に国際性が求められます。なお一層の研鑽を積んで素晴らしい法律家として活躍して下さい」と合格者を激励した。

合格者を激励する久野理事長

このあと、中央大学法曹会の千葉昭雄幹事長が、挨拶に立ち、「2つの点をお願いしたい。一つは、若いうちは勉強していただきたい。二つ目は、志を高く持って欲しい」と要望した。

来賓祝辞では、最高裁判所の甲斐中辰夫判事が、戦前のクーデター未遂事件で、内乱罪の適用が免除された神兵隊事件の話を持ち出し、「これは今考えてもおかしい。そういう一方で、吉田久先生（大審院判事）は翼賛選挙の無効判決を出している」と指摘。そのうえで「皆さんが目指す法曹は平坦ではないが、一歩一歩前に進み、逆境にも耐えることです。目先の利益にとらわれず、常に正道を歩んで、立派な法曹家になって下さい」と祝意を送った。

続いて、中央大学顧問（元理事長）の阿部三郎弁護士が、乾杯の音頭を

とり、合格者を祝して歓談に移った。

中大ロースクールで共に学んだ合格者も法曹を目指すようになったきっかけや目的は、さまざまだ。

勢揃いした新司法試験合格者

◆裁判官から弁護士に 方向転換◆

小林和彰さん（中央大学法学部卒）

が、法曹に興味を持ったのは中学生時代の公民の授業がきっかけになった。その時に勉強した裁判官の仕事に感銘を受け、「将来は裁判官になる」という夢を持った。

中央大学の法学部、法科大学院と着実に夢の実現に向けて前進していた小林さんに転機が訪れる。法科大学院の授業で法律事務所に研修に行った時だ。そこで弁護士の仕事を直に見ることができた。

小林和彰さん

「それまでは裁判官になるという漠然とした夢を抱いて突き進んできました。しかし、地域の人々や周りの人々に本当に感謝されている現場の弁護士さんの姿を目の当たりにして自分もそうなりたいと思いました」

それから、小林さんは裁判官ではなく弁護士になることを決意し、勉強に励んだ。「将来は周りの人が楽しく、幸せになれる環境を提供できるような弁護士になりたい」と抱負を語ってくれた。

◆「社会正義」実現するため 弁護士に◆

藪ノ内寛さん（中央大学商学部卒）

藪之内寛さん

が弁護士を志したのは、「自分で独立して仕事ができ、社会正義を実現したいと思った」からだ。公認会計士も考えたが、法律、会計サークルに所属していた学部生の時、現役の弁護士の話を聞く機会があり弁護士を目指すようになった。

学生時代はさぞかし勉強に励んでいたのだろうと想像してしまうが実際は、「確かに勉強はしましたが、

3年生まで野球サークルに所属していました。アルバイトもしましたし、仲間としっかり遊びもしました」という。勉強以外にも充実した学生生活を送っていたようだ。

藪ノ内さんは、将来は独立し、商学部で学んだ知識も活かせる民間企業の法務部門に携わる仕事がしたいと考えている。

◆中小企業の事業再生に関わりたい◆

「最終的には、事業再生にかかわる法曹家になりたい」というのは**佐藤丈宜さん**（中央大学商学部中退）。

佐藤丈宜さん

大企業ではなく中小企業の事業再生にかかわりたいという。学部生のときから法職多摩研究室に所属して3年間勉強し、中央大学を3年で中退して中央大学ロースクールへ飛び入学した。

「新司法試験と公認会計士試験の両方をとりたいと思っていた」という佐藤さんは、新司法試験合格者には、公認会計士の試験で免除になる科目もあるため、まずは新司法試験の方から始めた。授業の予習・復習に加え、試験に一見関係ないようにみえる研究論文を書いたり、エクスターンシップとして弁護士事務所での3週間の研修に参加したりしたという。

「研究論文は論理構成能力、思考力を高める勉強になります。エクスターンシップは、机の上の勉強から離れるので敬遠する人が多いけど、私は将来自分がどのようなところで働くのかを知りたいと思いました」と佐藤さん。

法曹界を目指す後輩へは、「単なる目先の試験対策ではなく、自分の将来像を見すえて、それにあった勉強をすること」とアドバイスした。

◆「第一人者」の分野を開拓したい◆

「『私が第一人者』という分野を開拓したい」と前を見据えるのは**仲村渠桃さん**（中央大学法学部卒）だ。

仲村渠桃さん

「これからは弁護士の数が増えると言われていますが、厳しい競争の中を生き残るために、人に負けない強みを見つけていきたいです」。

ロースクール時代は朝早く登校し、終電で帰るというハードな毎日が続いた。毎日の通学時間を利用して、電車の中でも勉強をした。勉強をすることは毎日のルーティーンの一部に組み込まれており、特に苦になることはなかったという。

司法試験という大変な試練を乗り越えたいま、一番やりたいことを尋ねると、「これまで自分を支え応援してくれたたくさんの人々に感謝の気持ちを伝えにいきたい」という答えが返ってきた。

同じ道を志す後輩に対しては、「自分がやると決めたら、早いうちから信念をもって取り組んで欲しい。つらくなったときは自分の将来ビジョンを思い描き、そのつらさを振り切って頑張ってください」とエールを送った。

◆友人と罰金ルールつくり勉強に励む◆

「いまも信じられない」と目を輝かすのは**堀田ひとみさん**（中央大学法学部卒）。友人と一緒にホームページでそれぞれの合格を確認した後、

堀田ひとみさん

喜びのあまり二人して倒れこんだという。「そのあと法務省まで写真を撮りに行きました。その日は興奮して眠れなかったです」。そう語る堀田さんの表情は喜びに満ち溢れていた。

ロースクールで一番大変だったのは、「授業準備と試験対策の両立でした」という。授業での課題に対する解答を準備する一方で、過去問を解いていく試験対策を両立させるため、朝が弱いという堀田さんは、友人4人と朝9時に学校の教室の席に座っていないと罰金300円を支払うという決まりごとをつくっていた。これは効果抜群で、朝の授業準備の時間をつくるのに役立ったそうだ。

エクスターンシップで魅力的な弁護士と出会ったことで、弁護士を志している堀田さんは、「司法修習で頑張って、さらに自分を磨いていきたい」と誓った。

◆小学生から夢見ていた検察官◆

小学生の頃から検察官を夢見ていたというのは、**保田明子さん**（中央大学法学部卒）。夢を叶えるために入学したロースクールでは、「2年生の頃は本当に大変でした。授業についていくのが必死という状況でしたね。授業準備にはかなりの時間をかけました。授業と同じかそれ以上の時間は必ずやっていたと思います」と振り返る。

保田明子さん

努力の末に栄光をつかんだ保田さんは、「メリハリをつけて勉強を進めることが大切です。勉強がいやになってしまったときは、気分をリフレッシュするとやる気も復活しますよ」と後輩達にアドバイス。

中大ロースクールについては、「実際に弁護士として働くOBの話を聞く機会がたくさんあります。実際に働いている人の話はリアリティーがありますし、自分の将来を考えるよいヒントにもなります。私はこの学校を選んで本当によかったと思っています」と語った。

◆祖父の背中を見て弁護士目指す◆

弁護士をしていた祖父の姿を幼い頃から見てきた**戸田謙太郎さん**（東京大学卒）は、「弁護士という職業が自然と頭にありました」という。はっきりと弁護士になろうと決意したのは、高校に入った頃だった。

戸田謙太郎さん

東大法学部を卒業し、中大ロースクールへ進学。「ロースクールでは、1人よがりにならずに、様々な視点や考え方を学びたい、と考え、実務家や先生方などできるだけいろいろな人と出会い、交流することを心掛けていました」と戸田さん。

また、国際交流プログラムを活用して、オーストラリアのロースクールに2週間、短期留学した。現地では、裁判所や法律事務所などを見学し、将来、国際弁護士として働くイ

メージをより具体的にすることができた。「将来は国際事件を扱ってみたい」という目標を持つ戸田さんは、その目標への第一歩として今年、米ニューヨーク州弁護士の資格も取得した。自分が掲げた目標に向かって着実に前進している。

◆医者志望から弁護士志望へ◆

「もともとは、医者になりたかったんです」と語るのは、**生井澤葵さん**（早稲田大学卒）。人を助ける仕事がしたいと考えていた生井澤さんが、弁護士を目指したのは高校生の時。当時、テレビや新聞で医療過誤の問題が多く取り上げられていた。「医者は神ではないんだということに気づいたと同時に、法律の整備が必要だと感じたんです。法律の方がより多くの人を救うことができるのではないかと考え、医療分野で活躍する弁護士になりたいと思いました」という。

生井澤葵さん

ロースクールでは、学校のない日も朝9時から夜11時半まで開いている自習室を利用して勉強した。「自宅だとなかなか集中できない勉強も、自習室では集中することができました」。でも、「もちろん沢山遊びもしました」という。司法試験には体力も必要だと考えてテニス教室に通ってリフレッシュしていた。

「近所のお姉ちゃんのような身近な弁護士になりたい」と生井澤さんは、「今まで遠い存在だった法曹はもっと身近な存在になるべきだし、自分もそうなりたい」と将来を見据える。医療分野で活躍する弁護士になりたいと考えていたが、新司法試験に合格した今は、「医療分野に限らず、いろいろな分野に積極的に携わってみたい」と考えている。

◆「身近で親しみやすい法曹に」◆

「大学に入学した時は法曹になろうなんて考えてなかったんです」と**高遠あゆ子さん**（青山学院大学卒）は、大学入学当時を振り返る。高遠さんは小学1年生の頃から続けてきた馬術に大学4年の引退まで打ち込んでいた。馬術をやめようと考えた時、「社会にでるまでに何か身につけておきたい」と考えて法曹の道を志した。

高遠あゆ子さん

「ロースクールでは、とにかく様々な人、本、場所と出会いました」という。勉強はもちろん、学生だからこそできることをとことんやることで自分を磨いてきた。しかし、法曹を目指したのが大学4年だったこともあり、「ロースクールでは新しい分野の勉強についていくのが大変だった」。そんな苦労を乗り越えられたのは、「基本に忠実に」という馬術で学んできた精神と、共に学ぶ仲間の存在があったからだという。

「どんな職業を選ぶとしても、身近で親しみやすい法曹になりたいです」と法曹像を描く。「弁護士、検事、裁判官、どれも魅力的な職業だと感じています。司法修習を通して自分に合った職業、やりたい職業を絞っていきたいですね」と生き生きとした表情で話してくれた。

◆「社会に役立つ仕事がしたい」と志す◆

井上知可子さん（立教大学卒）は、弁護士を目指す。就職活動で将来の

ことを考えたときに、「社会に役立つ仕事がしたい。法律家になりたい」と一念発起。立教大学法学部を卒業後、2年間猛勉強して、中央大学のロースクールに入学した。

「中央大学に知っている先輩がいて、いろいろ話を聞いていたことや、刑事系の科目の評判がよかったことから、中央大学を選びました」という。「友達と雑談をすることが勉強の息抜きになりました」という井上さん。後輩へのメッセージは、「基本をとにかくやる。条文をきちんと読む。あきらめないことが一番大事」と強調した。

井上知可子さん

将来については、「やりたいことはたくさんありますが、特に、学部のときの論文で建築関係の紛争を書いたので、そうした関係を扱いたい」と展望した。

◆裁判員制度で弁護士にやりがい◆

「刑事事件に興味を持ち、弁護士を志すようになった」というのは、**森本裕己さん**(明治大学卒)。中学生、高校生の頃、20歳未満の少年による殺人事件がメディアを騒がしていたことが、興味を持つきっかけになった。

刑事事件の弁護については、「確かに難しいところもあると思います。被告が無実なら徹底的に戦いますし、たとえ有罪だとしても反省を促しながら適切な量刑になるように戦いたいと思います。裁判員制度が導入され、司法の場への人々の関心は高まっています。やりがいは充分にあります」と意気込む。

森本裕己さん

森本さんは、明治大学の法科大学院にも合格したが、伝統があり、知り合いの先輩が通っていた中央大学の法科大学院に進学した。「話に聞いていたよりも充実した勉強ができ、中央のロースクールにして本当によかった」と感謝の気持ちをあらわした。

◆「根気よく教えてくださった」と謝辞◆

懇談の後、合格者を代表して、**井上知可子さん**が謝辞に立ち、「法科大学院で授業後やオフィスアワーに先生のもとへ行くと根気よく教えてくださいました」と先生方に感謝。また「切磋琢磨する友人がいたからこそ、2年間、試験勉強を頑張ることができました」と述べ、友人・同僚たちに謝意をあらわした。

最後に、福原紀彦・中央大学法科大学院研究科長が、「みなさん、おめでとうございます。今後、更に厳しい司法修習があります。厳しいときは、原点に戻らなければなりませんが、その原点が母校・中央大学であって欲しい。出世だけでなく、国民のため社会のためにあらゆる面で活躍して欲しい」と合格者を激励し、祝賀会を締めくくった。

学生記者取材班

伊藤知広（経済学部4年）／駒田恵（法学部4年）／武田朋実（法学部4年）／吉田百合香（法学部4年）

国家公務員等採用Ⅰ種試験
合格者祝賀・激励会
25人が合格、8人が中央省庁に内定

2009（平成21）年度「国家公務員等採用Ⅰ種試験合格者祝賀・激励会」が11月21日、後楽園キャンパス3号館10階で行われた。今年度の合格者は25人で、この日は中央省庁の内定を得た8人が出席、お祝いに駆けつけた来賓や大学関係者、本学卒の現職の国家公務員らに、今後の活躍を誓った。

◆「他人の振り見てわが身をただす」永井総長・学長が激励◆

午後5時、永井和之総長・学長の挨拶で祝賀・激励会が始まった。永井総長・学長は、「みなさんおめでとう。これからの人生は長い。他人の振り見てわが身をただす、ということを大事にしてもらいたい。素晴らしい官僚になって頂きたい」などと述べ、内定者を励ました。

挨拶する永井和之総長・学長

続いて、本学OBで国税庁東京国税局徴収部長の脇本利紀氏が、祝辞に立ち、「君たちには、自分の頭で考え、新しい仕事をつくっていってもらいたい。そのために、健康と、先を考えて仕事をする癖、人を説得する力、文章を書く力、この4つを大切にして欲しい。これらをこなせば役人の世界で生きてゆける」とアドバイスした。

また久野修慈理事長が、「君たちが勇気を持って職務を全うすることで、中大を活気づけ日本を元気にすることができる。ごまかしや妥協をせずに、シンプルに勇気を持って日本のために働いてほしい」と激励した。

このあと合格者が紹介され、それぞれが一言ずつ挨拶したのに続き、法学部公共政策研究科の今村都南雄教授が、「今の霞ヶ関は楽ではない。だからこそ、やりがいがある。大事なことは日の当たらない時、場所で何をするかだ」などと述べて乾杯の音頭をとり、歓談に移った。

合格者を激励する久野修慈理事長

中央省庁の内定を得た8人に、学生記者がそれぞれ話を聞いた。

◆財政赤字を懸念し、会計検査院へ◆

会計検査院から内定を得たのは、**○○さん（掲載者の都合により削除しています）**。公務員試験を目指し始めたのは、2年生の秋頃から。

弁護士を目指して「ロースクールに進学するか迷った」そうだが、莫大な借金を抱える日本の財政のあり方に疑問を持ち、進むべき道を決めた。

膨らむ一方の日本の財政赤字を減らしていくために、国が資金をきちんと運用しているのかチェックしていくのがこれからの仕事だ。

「常に国民の視点にたった仕事がしたい」。独立性の強い会計検査院は、政府に財務体質を改善する問題意識をもたせ、それを実施にうつさせるには強い正義感が必要で、「だからこそやりがいがある」と決意は固い。

総務省に内定したのは、**伊藤光子さん**（法学部）。「3年生になりたての頃から少しずつ勉強を始めた」という伊藤さん。ただ、「本腰を入れたのは試験直前の3年生の9月から」という。

当初は「困っている人を助けたい」との思いから弁護士を目指していた。しかし、「弁護士では自分発信の問題解決に留まることに限界を感じ、もっと広い視点で困っている人を助けたい」と考え国家公務員Ⅰ種試験の受験を決めた。

伊藤光子さん

総務省では、「情報通信を駆使して人々の生活を便利に、より豊かにしていきたい」という目標を持っている。

秋山祐太さん（法学部）は、内閣府に内定を得た。「国民に関わる仕事ができる公務員にやりがいを感じていた」という秋山さんは、2年生の10月から勉強を始め、毎日8時間、直前期には13時間の勉強をこなしてきた。

秋山祐太さん

「国家公務員は、公私のバランスがとれるような環境が完備されていない」との認識に立ち、内閣府では、「公務員を含む、日本国民全体のワークライフバランスの実現のために働きたい」と考えている。

後輩に対しては、「自分が何のために勉強しているのかをきちんと考えて、熱い気持ちで取り組んでほしい」と話してくれた。

◆治安の良さ維持したい、と法務省へ◆

「外国人参政権や戸籍の問題など、幅広く色々な仕事をしたい」と語るのは、法務省から内定を得た**坂本和寛さん**（法学部）。法務省を選んだ理由は、「四季があり自然が豊かで、治安が良く安全な日本が好きなんです。日本は一番住みやすいと思う。そんな日本の良さを維持したいからです」と明確だ。

小さい頃は警察官になりたかったという。しかし、大学に入ってから、現場で犯罪を解決するより、「国全体から犯罪をはじめとした様々な問題を変えていきたい」と思うようになり、国Ⅰを目指した。

勉強は予備校を中心にしていたが、1日10時間勉強する日もあれば、全くやらない日もあるなど、「無理はせずマイペースにした」という。

後輩に対しては、「誰にも譲れないことを見つけて、頑張って欲しい。細かいことは気にしないことも大切です」とアドバイスをしてくれた。

半藤祐輔さん（法学部）も法務省から内定を得た。合格者紹介の挨拶で、「再犯者を減らす努力をしていきたい」と語っていた半藤さん。も

う少し詳しく聞くと、「現在、全犯罪数の6割近くが再犯で占められている現状があります」と指摘。そこで、

半藤祐輔さん

「犯罪を減らすには再犯者を出さないことが大事。つまり犯罪者の矯正が効果的であると考え、法務省を志望した」と説明してくれた。

大学入学時には検察官になりたいと考えていたが、3年進級時にロースクールに行くか公務員を目指すか迷った末、最終的には公務員に決めた。勉強は「独学だった」という。まず一冊問題集を解いてみて、自分ならどれくらいやればいいのかを逆算したそうだ。本格的に始めたのは試験の2、3ヶ月前、短期集中の勉強で試験に臨んだ。

入省後については、「まずは現場の刑事施設を見て改善点を見つけることから始め、本省では問題点を正して犯罪を減らしていきたい」と抱負を語ってくれた。

同じく法務省に内定を得て、犯罪者の矯正に携わるのは**後藤裕美さん**（大学院文学研究科）。矯正局で少年犯罪を減らすための仕事を行うという。

後藤裕美さん

大学時代は教育学を専攻し、教育行政について学び、その研究を深めるために大学院に進学したが、研究職の道は選ばずに一般企業への就職を目指した。しかし、不況のためか就職はうまくゆかず、12月になって自ら教育行政に携わることを目指し、公務員の勉強を始めた。

「1日最低6時間のノルマを課し、朝晩3時間に分けて集中的に勉強しました」という。予備校には通わず、勉強は独学で行った。「文学部の中でも国Ⅱを目指す学生は多いですが、国Ⅰはハードルが高いためか、あきらめてしまう学生が多い。法律が未修でも合格できます」と後輩たちにメッセージをくれた。

◆行政研で学び、国税庁へ◆

「社会で起きる様々な問題に『税』という視点から解決策を見出したい」と語るのは、国税庁から内定を得た**長内泰祐さん**（法学部）。「経済取引がグローバル化する中で、課税権を適切に行使することで国民の生活を良くしていきたい」と抱負を語ってくれた。

「将来の職業を決めてから、法学部を選びました」という長内さんは、入学当初から行政研究会に所属し、勉強を重ねてきた。「3年生になると、勉強が本当に嫌になった。そんなとき仲間と話をすることでストレスが発散できた」と振り返る。

長内泰祐さん

国土交通省に内定した**加藤重人さん**（大学院公共政策研究科）は、大学3年時に細野助博教授のもとで「街づくり」を学んだことがきっかけで、国家公務員を目指すようになった。実家がある秋田に帰るたびに、「地方の衰退を目の当たりにしていた」こともきっかけだった。

公共事業のあり方については、「将

加藤重人さん

来、本当に必要なものを選んでいきたい」と意気込みを語ってくれた。「難しい試験だが、魅力を感じているならばどんどんチャレンジしてほしい」と後輩へのエールを頂いた。

和やかに懇談が進んだ後、合格者を代表して秋山さんが、「真剣に勉強に集中できる環境をつくってくれた大学、幅広い視野を養ってくれた先生方、また面接指導をして下さったOB・OGの方々に感謝します。これからが大切だと思っています。仕事を通じて、お世話になった方々にお返ししていきたいです」と謝辞。

最後に橋本基弘法学部長が閉会の挨拶に立ち、「みなさんは中大の誇りです。人間的な魅力を磨くこと、学閥などではなく仕事で勝負することを大切にして欲しい」と激励し、祝賀・激励会を締めくくった。

（学生記者　新部真子＝文学部４年／池谷祐宜＝商学部３年／望月繁樹＝文学部２年）

大学スポーツってこんなに面白い～ 五十嵐圭選手らが出席してシンポ開く

「FANFANISPORTS ★～大学スポーツってこんなに面白い～」のテーマで「第３回スポーツシンポジウム」（主催：ＦＬＰスポーツ・健康科学プログラム、企画・運営：河田ゼミＣ）が11月10日、９号館クレセントホールで開かれた。

今回は、昨年の「応援に行ってもらおう！」というテーマから発展させ、「中大スポーツの魅力」が主題。アメリカンフットボールのＸリーグアサヒ飲料チャレンジャーズの有馬隼人さんの司会で、元陸上競技部の飯出昌彦さん、アメフト部ＲＡＣＯＯＮＳ主将の蓮田和平さん、ブラスコアー部兼体育連盟常任委員長の山本竜平さん、それに中大バスケットボール部ＯＢで、ＪＢＬトヨタ自動車アルバルクで活躍する五十嵐圭さんをパネリストに招き、大学スポーツの魅力について語り合った。

まず、それぞれの活動について報告したなかで、蓮田さんは、「入学当時は観客が少なかったんですが、ＯＢがサポーターズクラブ（ＲＳＣ）をつくってくれたおかげで、応援に来てくれるようになったし、ケガをしても組織がしっかりしているので、適格なサポートをしてくれて、とても良い環境でプレーしています」と満足そうに話した。

飯出さんは、「1、2、3年生の時は全然成績が上がらなかったんですけど、4年の最後の試合でサクセスストーリーが待っていたんです。4年間、挫折しながらも頑張って続けてきたからこそ報われたんだと思います」と競技生活を振り返った。

また五十嵐さんは、「4年間寮生活をしながらバスケットに励んできましたが、この4年間の練習や人との出会いがあったからこそ、今の自分がいると思います」と感謝の気持ちをあらわした。

次に、それぞれのスポーツの魅力について話し合った。蓮田さんは、「アメフトの魅力は熱さです。いろいろなポジションがあり、それぞれの役割が異なっている。大学からスタートする人も多く、4年間で名選手になれる可能性があることも魅力ですね」と熱く語った。

飯出さんは、「陸上の魅力はシンプルさです。（100メートルは）約10秒で集約されるため、集中力がとても大切なスポーツです。数字で明確に勝ち負けが決まるのも特徴で

すね」と語った。

またバスケットボールの魅力について五十嵐さんは、「魅力は、試合展開の速さですね。コートの中でディフェンス、オフェンスが頻繁に入れ替わり、1秒あれば逆転できることが特徴です」と強調した。

最近メディアの取材を受ける機会が増えてきている五十嵐さんは、「バスケを多くの人に知ってもらうため」にそうしているという。その結果、今では多くのファンが試合会場に足を運んでくれるようになってきた。「お客さんが多いとプレッシャーはありますが、とても元気が出る。だから、感動を与えたいと思いながらプレーしているんです」と五十嵐さんは相乗効果を強調した。

一方、ブラスコアー部で応援団に参加する山本さんは、「真剣にプレーしている人たちを見るとパワーをもらうことができます」と応援の楽しさを語り、試合会場に足を運べば音や振動、熱さを肌で感じられることをアピールした。

五十嵐圭さん（前列左端）が参加したスポーツシンポジウム

河田ゼミでは、来年の創立125周年を記念して、硬式野球部の対早稲田大学との試合を神宮球場で開催することや、現役学生とOB・OG、教員らによる中大リレーマラソンを行うことを予定している。

（学生記者　橋本あずさ＝法学部2年）

良い会社とは！面接官の心に残るには！「女子学生のための就活直前セミナー」開く

厳しい“就職戦線”が伝えられるなか、「女子学生のための就活直前セミナー」（主催：中央大学学員会女性白門会＝通称WINGの会）が11月28日、多摩キャンパス8号館で行われた。会場には、開会前から就活を控えた数多くの女子学生が姿をみせ、主催者の予想を上回る約260人が、3時間を超すセミナーを熱心に聴き入った。

セミナーでは、まず東洋経済新報社『就職四季報』編集長の赤峰みどり氏が、「就職四季報からみる女子学生にとって良い会社とは」をテーマに講演。このなかで赤峰氏は、「就活とは自分と会社との接点を探すこと」とし、そのひとつのツールとして『就職四季報』を紹介して、その活用法について説明した。

「2010年採用は前年比3割減」との厳しい状況を紹介し、そのなかでもとくに文系女子がしわ寄せを受けた、と報告。そのうえで「採用される属性」をどう見分ければよいか、など、『就職四季報（女子版）』の読み取り方について企業の最新のデータを用いて解説した。

休憩をはさんで後半は、「面接官の心に残るエントリーシートとは」と題して、株式会社文化放送キャリアパートナーズのキャリアコンサルタント、平野恵子氏が「エントリー

シートの書き方」について講演した。

平野氏は、採用する側が就職希望者のエントリーシートや面接を通して知りたいのは、1番は「人柄」、2番は「志望の動機」、3番目は「今後の可能性」であることを紹介。総合して人事担当者は、「会社に入ってからの『のびしろ』をみている」と強調した。

そのうえで、エントリーシートの書き方のポイントは、テーマをひとつに絞り、結論、理由、具体例（経験）、まとめの順でPREP法を用いて書くこと。具体例にはエピソードを挙げて、そのときの行動や思いを通して自分の人柄を伝えること。その際には、「とても」「すごく」「一生懸命」など主観的な言葉は避けること、などが大切と指摘した。

セミナーには数多くの女子学生が集まった

両氏の講演では、「就職活動はお見合いと同じ」とか「就職活動は相手（会社）側の気持ちになって考えることや相手に関する情報収集が大切」といった良い相手を見つけるための積極的な姿勢が一貫して強調された。

会場内は終始真剣な雰囲気で、キャリアセンターの山田寛子さんは「それぞれ専門家からの話は学生には貴重な話で、真剣に聞く姿勢が印象的だった」と話していた。

（学生記者　山岸怜奈＝総合政策学部3年）

「総合3位目指す」に激励の熱い声援
箱根駅伝の選手激励会開く

正月2、3両日の「箱根駅伝」まで1カ月に迫った12月4日、「中央大学箱根駅伝を強くする会」主催の選手激励会・会員懇親会が上野精養軒で盛大に開かれた。この日は、熱烈な中大駅伝ファンはじめ大学関係者ら約140人が出席。「総合3位を目指す」と誓う選手たちに対し、「頑張れよ！」の熱い声援で励ました。

冒頭、挨拶に立った「強くする会」の上岡君義副会長は、かつて高木友乃助総長（故人）が新聞紙上で「仲間を楽にさせる思いやりの心情」を説いたことを紹介し、「（あとに走る仲間のことを思い）最後まで粘り強い走りをして欲しい」と選手たちに激励の言葉をおくった。

続いて久野修慈理事長が、「伝統ある魂を伝授して欲しい」と選手たちを叱咤したうえで、「箱根駅伝を徹底強化していく」と挨拶。次いで永井和之総長・学長、それに井上彰陸上競技部部長（法学部教授）が挨拶に立って、選手の健闘を祈念した。

これらの激励にこたえて、浦田春生陸上競技部駅伝監督は、「総合3位を目指します」と宣言。「15位くらいまで各大学の力は拮抗している。最後は全員で勝ち取って、箱根を終わりたい」と総合力による目標達成を誓った。

次いで選手を代表して高橋靖主将が、「優勝争いに食い込んでいけると思う」と力強く挨拶すると、会場

「総合3位を目指す」と挨拶する浦田監督

たあと、先に行われた全日本大学駅伝で健闘した大石港与選手に、「強くする会」の熊谷秀男会長から努力賞が贈られた。

乾杯の発声ではじまった懇親会では、選手らを囲んで歓談の輪が広がった。最後に応援団リーダー部、チアリーディング部、ブラスコアー部が披露する校歌を出席者全員で歌って、選手激励会・懇親会を締めくくった。

（編集室）

からは「頑張れよ！」「期待してるぞ」と大きな声援が飛んだ。井上洋平主務が4年生から選手を順々に紹介し

学生記者になりませんか

「Hakumonちゅうおう」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。
現在、多摩と後楽園キャンパスそれぞれで1年生の学生記者を募集しています。

- 元新聞社論説委員のプロや先輩の学生記者に取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

申し込み・問い合わせは
中央大学広報室『Hakumonちゅうおう』
編集担当：伊藤博まで
Phone：042－674－2048（直通）
E-mail：hiroito@tamajs.chuo-u.ac.jp